都留市史

資料編　古代・中世　近世Ⅰ

7　岩殿城

大月市賑岡町

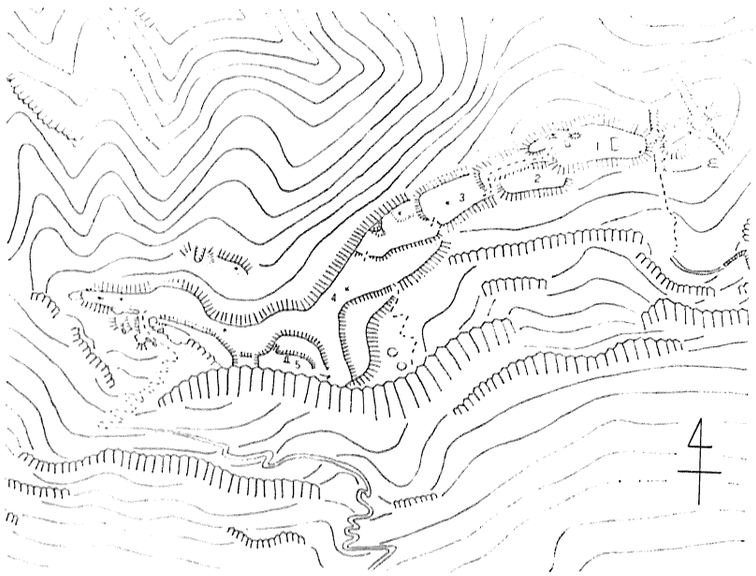
岩殿城は標高六三四メートル、比高二五〇メートルの岩殿山に位置する。岩殿山は南側を桂川に臨み、東側を葛野川、西側を浅利川に挟まれた山塊の一画にある山である。眼下に大月市街を望み、甲州街道を抑える要衝である。南方向都留市域への眺望も開けている。

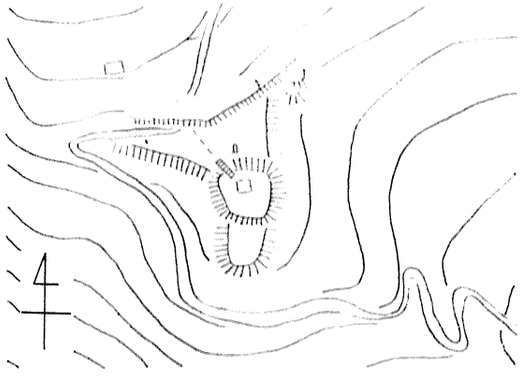
主要部分は山頂に集中している。東西二つのピークとその間の鞍部から構成されている。東側のピークから順番に説明することとする。その前に『甲斐国志』から遺構部分の記述を抜き出す。「西ニ登ルコト七町ニシテ頂ニ至ル即チ城跡ナリ此間嶮岨ニシテヨヂガタシ一ノ堀・二ノ堀・本城・馬場・大門口・蔵屋敷ト云地名アリ池二ツ常ニ水ヲ湛ヘテ旱天ニモ不涸亀ガ池ト名の一ハ用水一ハ馬洗水ナリト云伝フ」本文中の〈　〉はそれに該当すると思われる名称である。

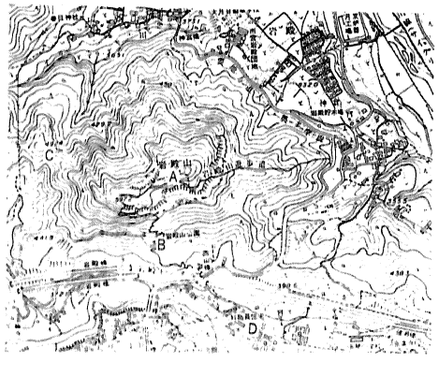
曲輪①がいわゆる本丸に相当し、最高所に位置する中心の曲輪である〈本城〉。現在電波塔が建っており、土塁は見られない。東側には幅一三メートルの堀切があり、両側を竪堀で落している〈一ノ堀〉。堀切には低い土橋が作られており、次の平場に渡ることが出来る。平場は削平されておらず、幅六メートルの堀切で東側を切られている〈二ノ堀〉。竪堀となって下っているが、前の竪堀よりも長く落ちている。ここが岩殿城の山上部分の東限となっている。これらの堀切は東側からの攻撃に対する重要な役割を果している。

曲輪①へ戻り、曲輪③へ進むことにするが、その間にはL字形をした虎口から土橋状の坂を経由する。この虎口は岩殿城で最も複雑であり、いわゆる桝形の原初形態と言える。虎口の南側下に曲輪②がある。城兵の居住地区として、風を防げる良い空間である。やや広い曲輪③からその下にある二段の平場を通ると曲輪④へ出る〈蔵屋敷〉。東側部分と西側部分をつなぐ城中最大の曲輪であるが、削平が不完全であり、堀切等も見られない。東側下には亀ガ池と呼ばれる二つの池がある。一つは用水、一つは馬洗池と伝えられているが、馬が山上に居たとは考えられないので伝承にすぎない。現在も満々と水が溜っており、高い山の中での重要な水源池となっている。全国的にも貴重な例である。

次に西側部分について述べる。全体が大きな岩盤の上にのっており、面積的にも広くはない。「乃木将軍詩碑」が立っている曲輪⑤が中心となる。大月市街、甲州街道を望む最高の場所である。その北側下には曲輪④から続く細長







第8図　岩殿城址縄張図（作図；池田光雄）

い平場が西側部分の西端までのびている〈馬場〉。その一〇メートル下に狭い平場が一段見られる。西側部分の西端は堀切を作っておらず、岩盤だけで防御を考えていたようである。

西端近くから麓へ下る虎口がある〈大門口〉。岩盤に狭まれてL字形をしており、自然地形に人工の手を加えた作りとなっている。山上部分の最も重要な虎口であり、いわゆる大手に相当する。門の一つは「揚木戸」と言われており、「番所」と言い伝えられる場所もある。

以上が岩殿城の主要部分となる。見上げた感じよりも広い面積を持っているが、山全体が天険の地形をしており、平面的には複雑な個所が少ない。土塁ははとんどなく、堀切・竪堀を最も弱点である東方向へ重点的に作っている。曲輪③から①へ入るルートは虎口と合せて堅固な構成となっている。大手とも言える岩盤で作られた虎口は他に類例がほとんどなく、岩殿城を特徴だたせる遺構である。

その他の遺構について説明する。まず「揚木戸」からしばらく下ると現在丸山公園となっている中腹に出る。いくつかの平場から構成されるが、他には明瞭な遺構は存在しない。大月方面からのルートの抑えとなっている。

「揚木戸」から少し下った所から西側へ山腹を回る道があり、約七〇〇メートル行くと兜岩との鞍部に出る。築坂と呼ばれており、大手門が立っていたと言われているが、後世に畑倉と御太刀を結ぶルートの切通しと思われる。堀切等の可能性はなく、城郭遺構があったとは考えられない。

山上部分へ戻り、東側へ下ることにする。東側端の堀切からが元々のルートと考えられる。しかし、岩殿の集落までの間には遺構が見られない。途中に長く広い土橋状の道が延びているが、堀切等は伴っていない。その東南方向に岩殿山から派生した強瀬と岩殿を区切る長い尾根がある。一九九一年現在、住宅団地の造成中で破壊が激しい。また、遺構も確認出来なかった。

山麓にはほとんど遺構が見られないが、いくつかの地名が残っている。北側に「堀」、「城戸狩」、「馬場」、東南側に「根小屋」、「陣出」、「的場」などである。家臣団の居住地域によく使われている地名であり、城将、城兵の生活空間と推測される。広い意味の岩殿城を構成している。

岩殿城に関する文献の一つに『浅野文庫諸国古城之図』がある。曲輪の形などかなり形式化しているが、平面配置は大体あっている。「本城」、「馬場」、「大手」の記載がある。また、「亀ガ池」については「水ノ手今ニアリ、馬冷場今ニ有」とあり、山上の水源池としての重要性が推測される。この図にも麓へのルートは南北二つしか存在しなく、要害性が良く分る。

『甲斐国志』に「麓ヨリ登ルコト七町ニシテ岩殿権現ノ祠アリ」とある。これは岩殿山が築城前に修験道の霊場であった名残りである。その起源は明らかでないが、山容からしてこの地方の修験道の中心であったと考えられる。現在は岩殿権現の小祠、七社洞窟、新宮洞窟などが山腹に残っており、山麓の岩殿には今は観音堂のみが立つ円通寺址、そしてその法統を継ぐ真蔵院がある。

岩殿城はほぼ独立した巨大な岩山上を主要部分として、土木工事が施されていた。しかし、家臣団の居住地域を含めると面積的には山梨県内でも有数の規模を持つ城郭と言えるであろう。

最後に歴史的な事柄について述べる。岩殿城は史上に名高い城ながら築城時期、築城者城将などは不明である。『甲斐国志』に「小山田氏ノ比ハ此山上ニ士多ク在番セシナルベシ軍鑑ニ駿河ニ久能、甲州ニ岩殿、上州ニ吾妻、三所ノ名城トアリ武田氏ヨリモ番兵ヲ加ヘ置シヤラン(中略)小山田ハ中津森又谷村ニ居館アリ此山ヲバ要害ニ構ヘタリ行程凡三里」とあるように一般的に小山田氏の要害説が言われている。しかし、最近になって武田氏の持城であるとの説も唱えられている。これは岩殿城は武蔵方面への拠点であり、また小山田氏に対する抑えの城であったとの説である。天正一〇年(一五八二)の武田氏滅亡の時、勝頼が岩殿城へ立てこもろうとした話もそれによる。

堀切については竪堀を伴っており武田氏の形態に近いと言われているが、他の遺構からはどちらとも判断しかねる。なお、天正九年に武田氏の在番衆に関する文書があるので、末期には武田氏が入っていたと推定される。利用価値を失った岩殿城は天正一〇年に廃城となり、以後利用されなかったと考えられる。

(池田　光雄)